

善光寺, その伽藍と町の場合と形成経過に関する一考察*

浅野 純一郎**

A Hypothesis on the Meaning of Place and Formation Process of Zenko-ji Temple

ASANO Jun-ichiro

This Paper aims to clarify the meaning of place and formation process of Zenko-ji Temple from the view of city planning method. This paper indicates following hypotheses mainly.

- 1) Zenko-ji Temple has been planned its place and been located on the southeast edge of Hanaoka-daira Plateau.
- 2) Hanaoka-daira was sacred burial place, Gokuraku-Jyodo, and Zenko-ji Temple was the facilities for the gate to Gokuraku-Jyodo.
- 3) The present grid pattern of Motoyoshi-cyo district has been almost completed around 1707.
- 4) The direction and the place of Zenko-ji Temple (Hondo building) has been planned from the key direction and the key length of old Zenko-ji Temple area (Garan area).

キーワード：善光寺，伽藍，善光寺町，形成経過，現本堂の位置決定方法

1. はじめに

2004年度より善光寺周辺伝統的建造物群保存予定地区調査（以下、伝建予定地区調査と略）が進められているが、この活動は善光寺周辺地区の伝統的建造物群保存地区（以下、伝建地区と略）指定を目標とするのは当然のこと、その先に同地区の世界遺産登録をも見据えている。周知の通り、世界遺産登録の初段階として、保存対象本体（コアゾーン）に加え、緩衝地帯（バッファーゾーン）を含めて政府に推薦されるという手続きがある。よって、伝建予定地区のみへの関心の集中から範囲を広げ、その周辺地域にも歴史的な意味合いや保存（あるいは保全）対象としての価値に関して焦点をあてる必要があると考えられる。それが本稿の動機である。その為の足がかりとして善光寺の場所と形成経過について俯瞰することを本稿は目的とする。元来、善光寺に対

しては、寺の由来や文化財としての価値については非常に多数の既往文献があるが、これに比べて、善光寺伽藍の場所的意味、あるいは都市的スケールからみた形成経過といった、都市計画的視点での分析は非常に少ない^{注1)}。本研究は、初歩的な試みではあるが、都市形態的な視点から善光寺の場所や形成経過に関して基礎的な考察を行う。

研究の方法は文献調査と地図分析、実測調査による。文献調査では、秀逸な論考を残した坂井衡平と小林計一郎に多くを拠る^{注2)}。地図分析では、近世期の絵地図の読映、2500分の1都市計画白図を元にした地形の3次元化等を行った。このような方法で、善光寺（伽藍と町）の場所や形成経過について初歩的な考察を試み、合わせて、善光寺を寺域部分だけで見る見方ではなく、その周辺部を含めて捉える必要性について言及する。

2. 善光寺の立地場所

善光寺は、善光寺平（長野盆地）の北西端に位置している。よって、善光寺から見ると、西方（右手）に旭山や葛山、北（背後）に大峯山や地附山が位置し、二方を山に囲まれている。しかし、立地場所のごく周囲（特に寺域の後方部）はそれらの山稜から

* 本稿は、平成17年度善光寺周辺地区伝統的建造物群保存予定地区調査報告書に向けて書いた論文に修正を加えたものである。

** 環境都市工学科准教授
原稿受付 2007年5月21日

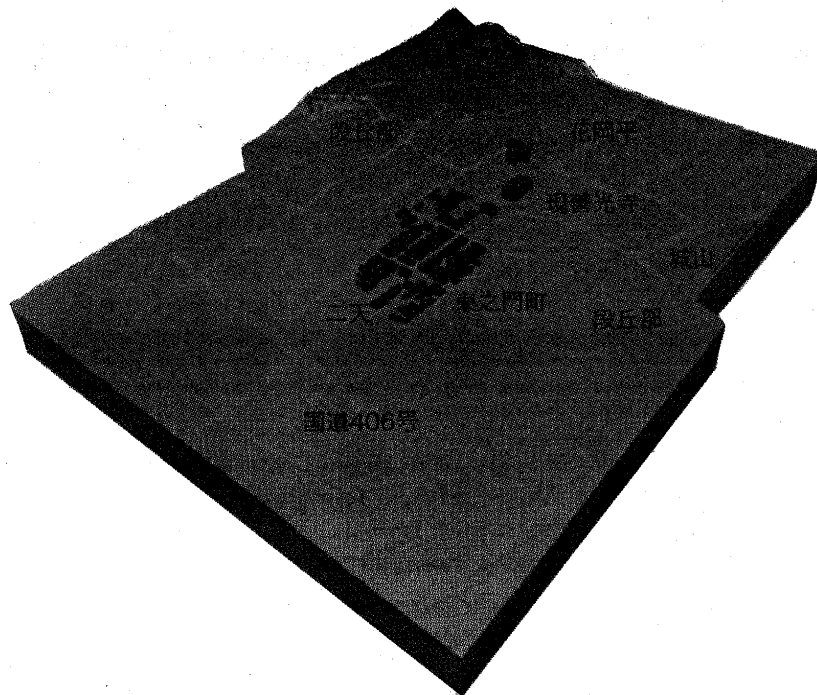


図1 三次元化してみた善光寺周辺地域の地勢

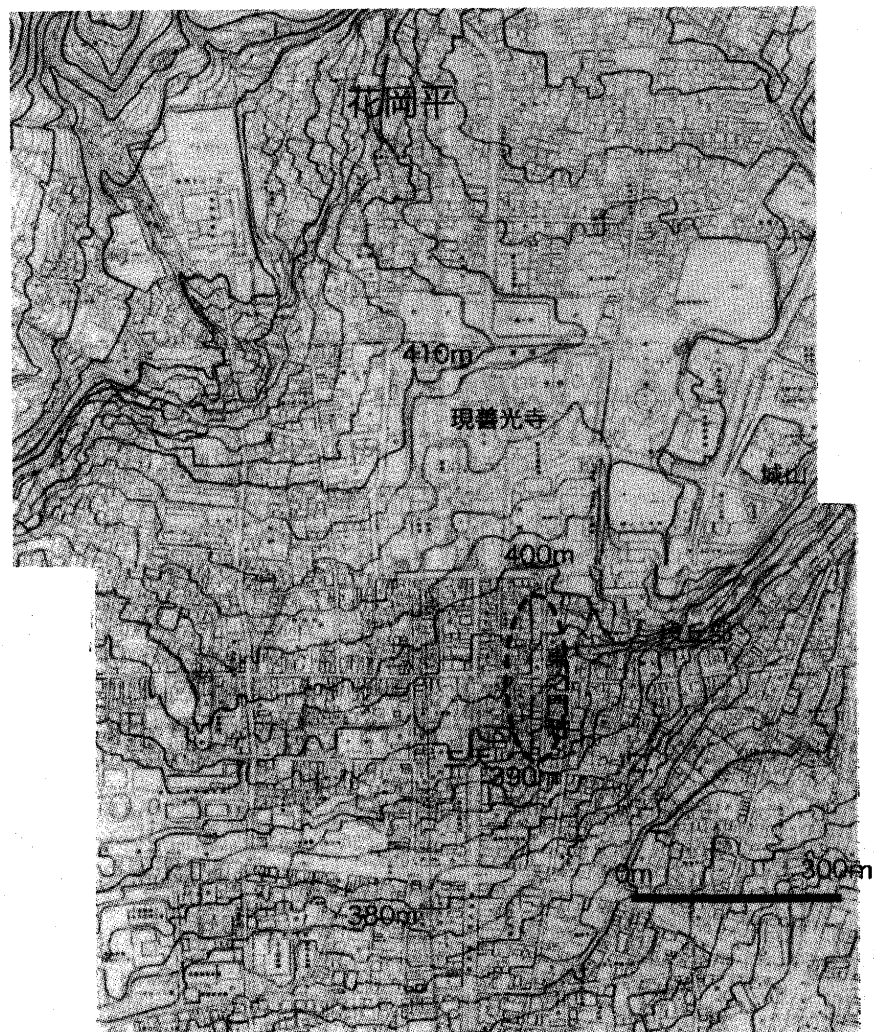


図2 善光寺周辺部の等高線
(2500分の1都市計画白地図を基に作成)

延びた丘陵地となっている（この地は「花岡平と呼ばれている」）。善光寺を中心に東西約 1km、南北約 1.5km の範囲を切り取り、地形を 3 次元化したのが図 1 である。これによれば、城山などの段丘地があるものの、善光寺の周辺部は南方や南東方面に緩やかに傾斜した、日当たりのよい高台地であることが分かる。

こうした場所に善光寺が成立した要因として、坂井衡平は、①当地が石器時代や古墳時代からの文化的先進地であったこと、②風水学的にみて四神相応の地であることを挙げている。①については、石器時代の蒐集物の量や種類が、盆地平坦部、浅川以北、戸隠地区、水内地区に比べ長野地区が最も豊富であることを指摘し、こうした文化繁栄の理由として地勢的理由（日当たりのよい高台）、湧水の豊富さを挙げている。古墳時代の蒐集物の結果も同じであり、古墳時代の長野は「既に余程郡内文化の中枢点に当り、付近ににぎやかな市場や駅や壮大な墳墓を造る様な勢力者が住していた事は明瞭に知り得るのである」としている^{注2)}。②についても、「大河の渡頭に当り、北に山を負ひ南に開け、広大な平地を控え、山部及び南北交通の交差点に位し、群の中央部に当たり、高井及び更埴諸郡との要地にも適している」とし、「換言すれば長野の地に天然に西道東流北丘南池の四神相応の地勢を占めていた」と指摘している^{注3)}。これらの理由は、善光寺の立地場所について極めて合理的で説得的なものではないかと考える。

一方、標高に着目すると、標高は二天付近で 392m、善光寺本堂付近で 406m であり、この間の距離は約 420m であるので比較的傾斜は緩やかであるといえる（図 2、直線勾配に直すと 1.9°）。しかし、二天から南方 300m の間では 15m 標高が下っており、勾配が急になっている（直線勾配で見ると 2.9°）。また、東之門町から東方へは 350m の間で約 20m 下っており（直線勾配では 3.3°）、こちらも下り勾配が急である。つまり、段丘地の東南端に善光寺（核部としての鎌倉期の伽藍）は位置している。古地図等から推測される古の善光寺町（寺域）は概ね東西約 150m、南北約 300m の範囲であるが、この寺域は高台地（花岡平）に乗せながら、かつ段丘部の南東際に計画したものと考えられる。

3. 善光寺の場と空間概念

3-1. 善光寺町の形成経過（文献から）

善光寺町の起源を古文獻から探る研究は、小林計一郎の「長野市史考」に詳しい。本節では、同書を元に時代毎の要旨を簡潔にまとめてみたい。善光寺の

創立時期は明らかでなく、境内から奈良時代のものと見られる瓦が出土することから、奈良時代には瓦葺きの堂舎があったことは確実とされる^{注4)}。しかし、古文獻によって善光寺町や伽藍の様子が記されるのは鎌倉時代からである。

【鎌倉時代】重源（1121-1206）の善光寺参詣（「南無阿弥陀仏作善集」）や、歌人信生法師の約 4 ヶ月間の滞在（元仁 2 年（1225 年））（「信生法師集」）の事実等から、鎌倉時代には相当多数の参詣者が善光寺に集まり、門前町の形成が始まっていたと推測されている。また、安貞元年（1227 年）に信濃国主を請け負った藤原定家は使者に信濃の視察をさせたが、その使者の報告「善光寺近辺を後庁と号し、眼代等の居所たり」から、鎌倉初期には善光寺門前（現在の後町）に信濃国衙が置かれていたとされる^{注5)}。

【室町時代】室町時代の善光寺町の様子を記す文獻に「大塔物語」がある。これは当時の信濃守護小笠原長秀が善光寺に入った様子を記すものであるが、「南大門」「西之門町」「桜小路」「後町」等々の地名が記されており、善光寺の四門外や南大門下の後町、西之門から西部の裾花川の谷口へ続く桜小路などには、門前町は当時すでに形成されていたとされる。また、少なくとも室町初期では、鎌倉期に続いて善光寺門前が信濃の行政の中心地であったと指摘されている^{注6)}。

【川中島の戦い】天文 22 年（1553 年）から永禄 7 年（1564 年）までの 12 年間に計 5 回の対陣・合戦があった。この間、武田、上杉の両軍は善光寺の仏像・仏具等を多数本国に持ち帰った他、大勢の僧侶が甲府や越後府中の新善光寺に移った。これにより、本善光寺は廃墟に近くなった。本尊が再び奉還されるのは慶長 3 年（1598 年）であり、近世善光寺町として復活するのは同年 7 月、徳川家康が千石の寺領を寄進して後である^{注7)}。

3-2. 鎌倉期にみる善光寺の空間概念図

一遍は文永 8 年（1271 年）と弘安 3 年（1280 年）に 2 度善光寺を参詣しているが、「一遍聖絵」には善光寺境内の全景が描かれている。坂井衡平は、この一遍上人絵詞や三河本証寺絵伝等の絵詞・絵伝、さらに応永縁起「文永炎上以後堂建立之次第」等を元に、鎌倉時代の伽藍を推定・考察した上で、鎌倉時代前期の院坊数を 49、後期を 85 坊と推測し、特に鎌倉中期以降の興隆を指摘している^{注8)}。また、東大門設置期についても考察している^{注9)}。今、善光寺の伽藍についての詳細には触れないが、坂井によれば、鎌倉期の伽藍には四門があり塀で囲われていた。また、伽藍範囲は南側が二天（南門）（図 3 の E3）の

ある東西ライン、西側が現西之門町付近、東側が東之門町付近^{注9}、北側が図3のB1-B5ラインで囲まれた範囲であり^{注9}、金堂はこの境内中央やや後方に位置していた。さらに、金堂の南には巨大な礼堂があり、この存在が近世期の伽藍との最大の相違点であった。つまり、3-1節の文献での記述と合わせると、鎌倉時代には確固とした伽藍があり、その周囲には院坊に加え一定の門前町の形成があった。さらに室町時代初期には、伽藍を核とした寺域の周辺に門前町の形成が一層進んでおり、これらは現在の町割の原型になったものと考えることができる。

また、坂井衡平は、花岡平付近一帯に散在する夥しい五輪塔群について言及している（これらの存在から、花岡平は五輪平と称されている）^{注10}。これらの分布地は数地区からなるが、五輪平蟹沢地区群、旧堂庭地区群（現元善町）、西長野地区群の3つが中心地であり、蒐集物に加え地下埋没のものを加えれば幾万基に上るとされる。また、その盛時は鎌倉期から南北朝期であった。こうしたことをふまえ、坂井は「斯様な広大な五輪供養場は、必ずや善光寺

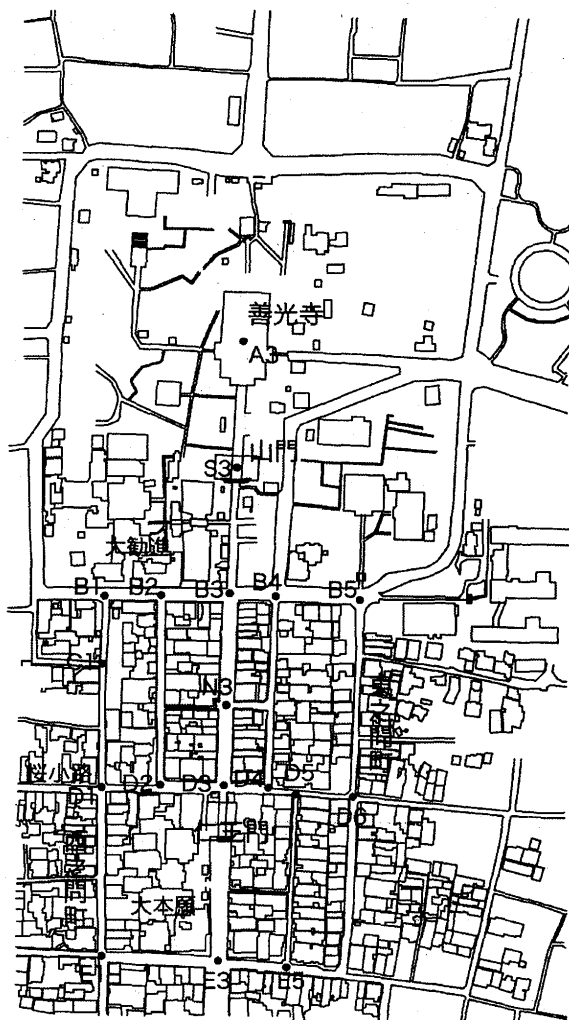


図3 善光寺境内部の現在の町割と建物配置
(500分の1道路管理図を基に作成)

の墓場即ち三昧場であったと見なくてはならぬ。

（中略）昭和の現時、滝上到大納骨堂の建設を見つつあるのは、偶然にも古歴史の再現である」と指摘している^{注10}。

以上のことと、2章でみた善光寺立地場所の地勢を考慮すると、図4のような空間概念図が得られる。つまり、善光寺後方の山で囲まれた花岡平の地と善光寺の前面では空間の位置づけが異なる。後方の花岡平は「聖」なる埋葬の場であり、極楽浄土の地であったのではなかろうか^{注11}。そして、花岡平の南方部にあたり、かつ城山から芋井方向に延びた段丘部の際に位置する善光寺伽藍の場所は、この極楽浄土への入り口に当たる。よって、善光寺の位置づけは極楽浄土へ誘う施設であると同時に、極楽浄土を演出する施設であったのではなかろうか。これが鎌倉期の空間概念図である。また、室町期には門前町の本格的な形成がなされるが、これは花岡平の「聖」に対する「俗」であり、場所的に見ても両者は明確に区分される。さらに、北国街道は善光寺表参道から急に方向を変え、城山からの段丘部の下側を通る形で北東方面へ延びるが、このコースも上記の空間概念図に従えば納得がいく。すなわち、大道は極楽浄土たる「聖なる場」をコースから外しているのである。

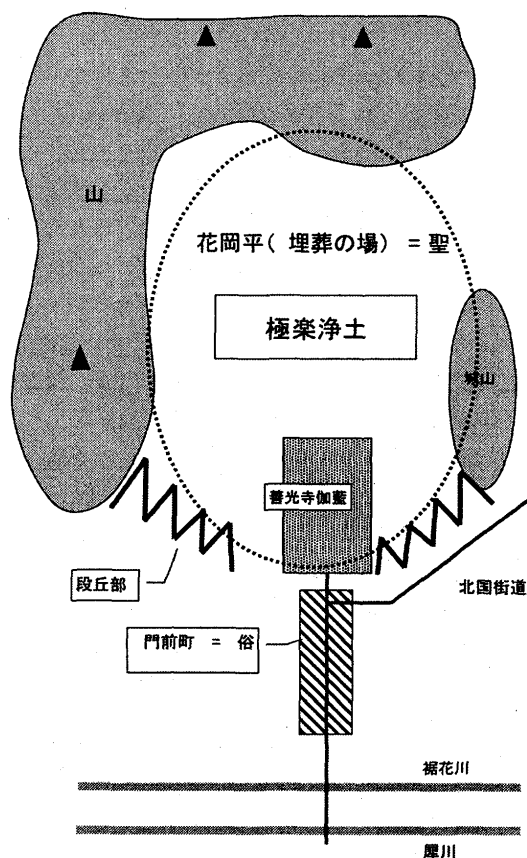


図4 善光寺とその周辺部の空間概念図

4. 善光寺伽藍部における町割について

(絵地図から)

近世期では、善光寺町を俯瞰する形で詳細にその様子を描いた絵地図が存在する。代表的なものは故関川千代丸氏蔵（現長野市立博物館蔵）の宝永4年（1707年）善光寺領地図（以下、宝永4年絵地図と略）などである。また、小林計一郎の「長野市史考」には、この絵地図や他の文献を総合して描いたと見られる元禄17年から宝永4年頃の善光寺町図が掲載されている（図5）。本章ではこの図と現在の住宅地図（図6）とを比較しながら、善光寺伽藍部の町割について簡単な考察を試みる。

まず図5や宝永4年絵地図には、二天門の東西ラ

イン部と仁王門の位置に現在のような石垣と石段が描かれているので、大本願のあるGブロック（記号は図6を参照のこと）やHブロックの造成はこの時点で完成していたと見られる^{注12}。Bブロックに着目すると院坊の配列に若干の変化はあるが、良性院、本覚院、最勝院などの配列は同じであるので、このブロックの造成も当時ほぼ完成していたと見られる。Fブロックに着目すると、円乗院、威徳院から常知院までの配列はほぼ同じであるが、その北側の教授院（図6）からは異なり、元禄17-宝永4年時のブロックは東西方向となっている（図5）。しかし、院坊配列の整合性からみてFブロックも常知院までは宝永4年時には完成していたと見られる。Iブロックに着目すると、院坊の配列はかなり異なっているが、

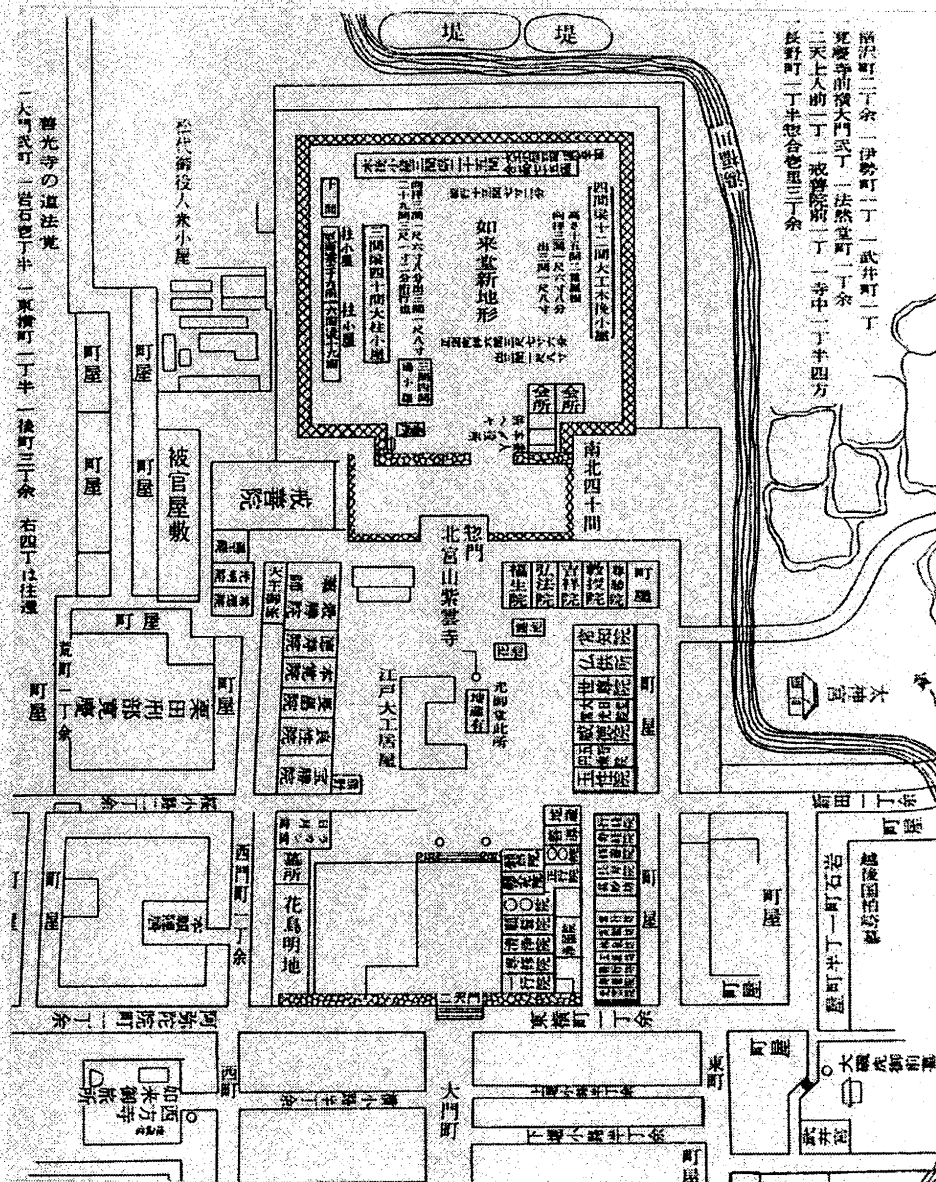


図5 元禄17年～宝永4年頃の善光寺境内の町割（「長野市史考」40頁より引用）

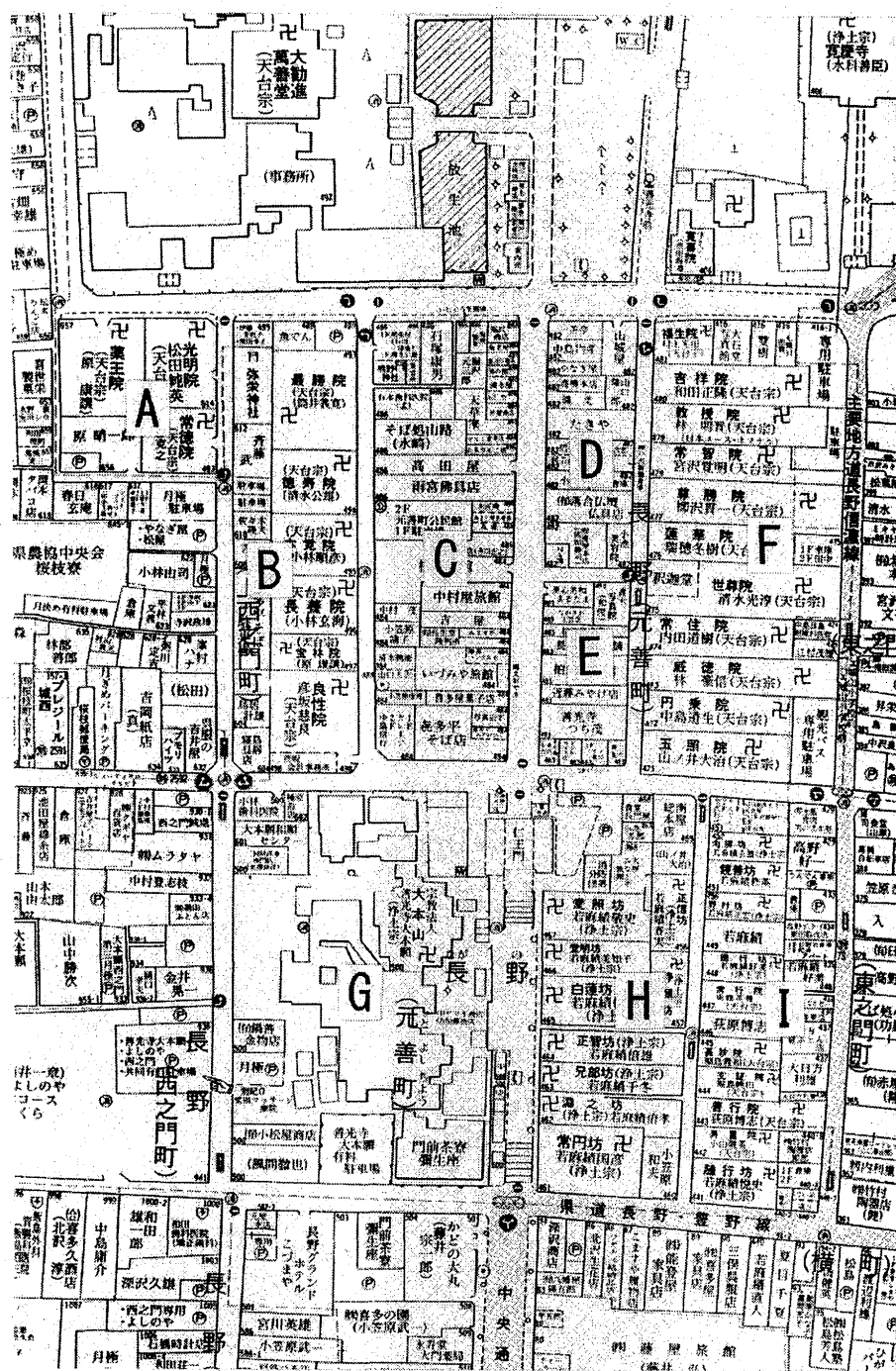


図6 住宅地図でみた現在の元善町付近

寿量院から玄証院までの配列は同じ事と町屋との背割り線が揃う様子が同じであるので、このブロックも宝永4年時には完成していたと見るべきだと考えられる。

善光寺伽藍部の等高線を見ると(図2)、南北や東西に規則的に描かれる部分がある。特にIブロックとFブロックの町屋との背割り線部では南北に等高線が揃っている(図2の○印部)。これは、この部分に石垣があり、人工的に平らな土地の造成を行った

為である。2章で見たように、寺域を段丘部の南東端に位置させていることから、平坦なブロック(街区)を築くには石垣を築き盛り土をする必要があった。そして、この背割り線部の石垣は現在もその一部が見られる。前記したようにI、Fの両ブロックは宝永4年時には完成していたとしたが、この石垣部も当時築かれていたのではない。また、寺領と町屋で地籍が大きく変化するとは考えにくい為、この町屋との背割り線部が鎌倉期伽藍の東側(東門のあるライ

ン)であったと見られる。戦乱期の衰退を経て近世初期に復興する過程で、伽藍を囲う塀が取り払われ院坊が立地するが、その過程でこれらのブロックは造成されたと見られる。

CとD、Eブロックに着目すると、両者(図5と図6)の相違から現本堂に移築される前の旧金堂は、この両ブロック部分にあったことが判る。また、Aブロックに着目すると、院坊の配列順序や町割形状が異なるので、宝永4年時にはこのブロックは完成していなかった。

5. 善光寺の軸性

5-1. 2500分の1都市計画白図の計測から

善光寺の軸線は、真北からどれくらいずれているのか、これを、2500分の1都市計画白図を元にして測定した。測定ラインは表1に掲げる11本であり、その場所は図3に示している。方法は、同図をCADに取り込み、CADソフト(Infomatix社のMicroGDS Ver.8.0を使用)の角度測定機能を用いて計測する、というものである。同機能では1°未満を計ることはできないが、なるべく取り込んだ図面を高拡大し、極力道路中心線間を結ぶように努力した。また、角度計測は製図的な手法で分度器を用いても行い、ほぼ同様の結果を得た。

まず、南北方向に着目すると(表1)、真北とのズレが大きいものでも、B1-C1のN4°E、D5-E5のN3°Eであり(真北から東側に4°と3°ずれている)、それ以外の街路のズレは2°未満にすぎない。これはかなり精巧な結果だと言うことができる。また、現本堂の南北軸はN2°Eであり真北から東に2°ずれているが、この軸のズレはA3~D3まではほぼ同じである。つまり、本堂本体の軸から参道A3-D3間の軸はほぼ一直線である。A3-D3間の参道とC、D、Eの3ブロックは宝永4年の現本堂落成後(あるいはその時)に造成されたと見られるが、これらは軸性の統一という点からみて現本堂との関係性が強いと考えられる。つまり、現本堂の南北軸と統一することを念頭に、この参道部と3ブロックが造成されたと考えることはできないだろうか。

5-2. 実測調査から分かる現本堂位置の決定方法

本節では、善光寺の中心軸(表1で示す中心軸ライン)に特に着目し、実測調査を行うことで、前節での仮説を深めることとする^{注13)}。表2では、測線毎のズレ(そのズレの場所がどこに当たるのかは図7に示す)と善光寺本堂の向きとのズレ(累積のズレ)を示す。まず、善光寺本堂とA3-S3間(本堂と山門間の線)のズレは3'35"にすぎず^{注14)}、ほとんど一直線

であることが判った。よって、A3-S3とのズレは善光寺本堂とのズレということになる。表2に示す測角結果から、E3から善光寺本堂へと歩んだ場合、各測線を通して度にわずかながら右方向に曲がっていくことが判る(図7に概略を示す)。そして、善光寺本堂の向きと、D3-E3のズレは1°47'5"である。

ここで問題としたいのは、前節で一直線であるとしたA3-D3間の軸である。実際にはB3-D3とA3-B3は45'27"ずれており(100m先で横に約1.32mのズレを生む)、このズレはB3-D3とD3-E3とのズレ(以下、D3のズレと呼ぶ)にほぼ等しいことが判った。しかしながら、仮に本堂(A3)とD3を現状のままとしてA3-D3を一直線にしようとする(ばB3を動かすとする)ば、現状のD3点のズレである41'35"よりも大きなズレが、D3-E3とA3-D3に生じることになる^{注15)}。あるいは、現在のB3-D3に合わせてA3-D3を一直線にするには、本堂の位置を現在より西に2m程度移動すればすむが、これをしていない^{注16)}。これに対し、現状はD3のズレ(41'35")とA3-B3とB3-D3のズレ(45'27")はほぼ同じである。よって、D3点とB3点を通して度に、より少しづつ同程度右に向きを変え本堂に向かうことになる。この微細な方向調整は計画的な意図を窺わせ、A3-D3間の参道とC、D、Eの3ブロック及び本堂との関係性が非常に強いことを一層証拠付けていると考えられないだろうか。さらに、A3(本堂の中心)とB3間の距離を500分の1道路管理図から計ると190mあるが^{注17)}、これは二天(E3)から旧如来堂跡(N3、場所は図3を参照のこと)間の長さに完全に一致する。つまり、二天から旧如来堂までの距離関係をB3(旧北門)から現本堂の距離に再現したと同時に、角度については、二天~仁王門間の軸D3-E3と旧如来堂の軸B3-D3とのズレを、B3-D3とA3-B3間でも取り入れる形で現本堂の位置を決定したのではないかと^{注18)}、と考えられるのである。

次に、本堂A3、山門S3、B3の位置関係に着目する(図8)。山門が建立されたのは1750年(寛延3年)であり、本堂建立の43年後であるが、本堂前から二天までの敷石は1714年(正徳4年)に完成している。つまり、山門によって生まれるはずの軸線ズレ(A3-S3とS3-B3のズレ)は、山門建造以前に、敷石の敷設によって現出していた。さらに、図5に見るように、現本堂建立時の敷地造成の際に、山門の建てられる場所がすでに垣で囲われ、造成済みであったことがわかる。測角調査の結果、山門の性格は本堂と関係性が非常に強いとみえ、A3-S3の軸は本堂本体と一致している(つまり、山門の向きと本堂の

表1 善光寺門前各路の方位

(2500分の1白地図から測定した結果を示す)

南北軸		方位	南北軸		方位
善光寺本堂		N2° E	西側	B4-D4	N2° E
中心軸	A3-B3	N2° E		D5-E5	N3° E
	B3-D3	N2° E		B6-D6	N1° E
	D3-E3	N1° E	東西軸		方位
東	B2-D2	N0° E	B2-B4		S89° E
	B1-C1	N4° E	D2-D4		S89° E
側	C1-D1	N0° E			

表2 善光寺中心軸方位 (実際の測量結果を示す)

No	線	前線からのズレ※0	累積のズレ ※1
1	A3-S3		これをNとみなす
※2 2	S3-B3	N0° 40' 55" W	N0° 40' 55" W
3	B3-D3	N0° 24' 35" W	N1° 5' 30" W
4	D3-E3	N0° 41' 35" W	N1° 47' 5" W
※3	A3-B3	N0° 45' 27" W	N0° 45' 27" W

この表でのNは真北ではない。

※0: 例えば、2欄「S3-B3」の数値は、1欄「A3-S3」をNとした時の方位でズレを示す。以下のラインも同じ。

※1: A3-S3をNとした時の方位で、累積のズレとは善光寺本堂の向きとのズレでもある。

※2: 2のズレは測角できない為、角S3B3A3の観測結果と500分の1道路管理図の図上測線長から導いたものである(注13)で詳述)。

※3: A3-B3は、S3点(山門)をとばし、A3とB3を直接つないだ線。

この欄のみ、A3-B3とB3-D3とのズレを示す

向きは一致している)。以上のことから、A3-S3 と S3-B3 のズレ (以下、S3 のズレと呼ぶ) は、山門の建造前、おそらくは現本堂建立時に設定されていた、言い換えれば、現本堂の位置と向き、山門の位置と向きは同時に計画されたと考えられる。その証拠として、500 分の 1 道路管理図を基に、S3 (山門の中心) -B3 間と A3 (本堂の中心) -S3 間の距離を計ると、共に 95m であり、これも完全に一致する。即ち、A3-S3-B3 が一直線でない以上、現本堂の建設時に図 8 の二等辺三角形が考慮されたことは間違いないのである。これによれば、S3-B3 と B3-D3 のズレ (0° 24' 35") と、A3-B3 と S3-B3 のズレ (0° 20' 27") はほぼ同じであり、B3-D3 の本堂方向への延長ラインと、B3 からの本堂の見通し線 (A3-B3) との角のほぼ中間に山門があることがわかる。そして、S3 でのズレ (0° 40' 55") は D3 でのズレ (0° 41' 35") とほぼ同じであり、二天～仁王門間の軸 D3-E3 と旧如来堂の軸 B3-D3 とのズレをここでも再現したのではないかと考えられる。また、A3-B3 軸に対して本堂本体のズレは 0° 20' 27" であり、D3 や S3 のズレ、さらには A3-B3 と B3-D3 とのズレのほぼ半分に収められている。

以上のことから、現本堂の場所と向きの決定方法について、以下の仮説が考えられる。まず、D3 でのズレを B3 で再現する形で、かつ二天～旧如来堂の

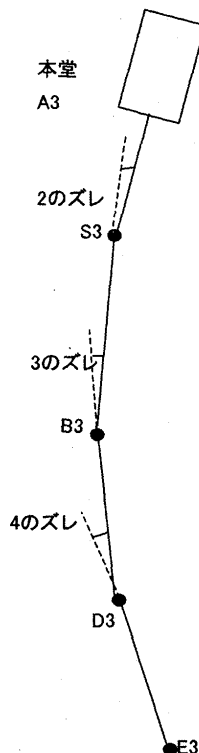


図7 善光寺中心軸のズレの概略

(図中の記号は表2中に同じ)

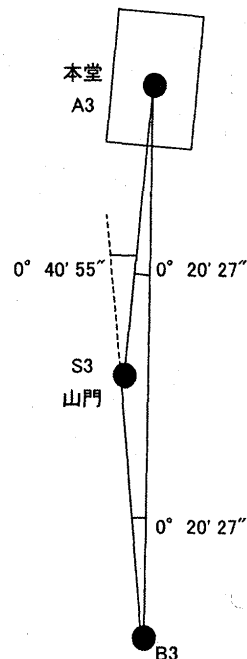


図8 善光寺本堂の向き

長さを A3-B3 で再現する形で本堂の位置を決めた。そして、本堂の向きと位置と山門の向きと位置を同時に決めた。その際に考慮したことは、山門を B3 と本堂の完全な中点におくことと、山門でのズレを D3 でのズレや A3-B3 と B3-D3 とのズレに揃えることだったと見られる。

6. まとめ

本稿は、善光寺 (伽藍と町) の場所と形成経過に関わる初歩的な考察である。よって、参考文献の渉獵は浅く、歴史の専門家等による研磨によって見方が改められなければ成らない。それでも、本稿は、善光寺の立地場所や空間概念、町割の形成経過等について、都市計画的な視点からいくつかの新しい見方や仮説を挙げている。今後、こうした見方を裏付けるさらなる事実の追加、あるいは、その見方を覆す事実の指摘等を通し、議論が盛り上がることを期待したい。本稿で示した見方や仮説をまとめれば、以下の五点である。

- ①善光寺伽藍は花岡平の南東端に計画的に築かれた。すなわち高台部に乗せながら、その南方にできるだけ寄せる形で計画された。
- ②鎌倉期の善光寺の空間概念図。花岡平は聖なる埋葬の場、極楽浄土であり、段丘部の下部とは位置づ

けが異なっていた。善光寺伽藍はこの極楽浄土への入り口部分にあって、善光寺は極楽浄土を演出し、極楽浄土を体現できる施設であった。

③現在の元善町は概ね鎌倉期の伽藍部に該当するが、その町割りの多くは宝永4年頃には完成していた。

④現本堂の位置と向きは二天から仁王門、さらには旧北門といった軸線のズレ、二天から旧如来堂間の距離等を再現する形で、つまり、旧伽藍の位置関係を新に焼き直す形で決められた。

⑤本堂と山門の向きは完全に一致し、両者の関連は非常に強い。そして、本堂と山門両者の位置と向きは同時に決められた。

現在進行中の善光寺周辺伝統的建造物群保存予定地区調査では、詳細な宿坊の実測調査や由来に関するヒアリング調査が行われており、これらの調査を通して、本稿で触れた町割の形成経過に関しても有力な情報が得られるのではないかと期待される。ともかく、本稿を通じて明らかのように、善光寺は寺域部だけに歴史的な価値や特別な場所性が備わっていると見るのではなく、その周辺部と一体で価値や場所性を見るべきだと考えられる。それは鎌倉期の空間概念図に明瞭のように、古くははるかに明確に感じられたものと考えられる。

注

注1) 土本俊和氏(信州大学工学部教授)、原田和彦氏(松代文化施設等管理事務所学芸員)のご教授による。尚、2007年4月現在、長野市文化財課では、善光寺周辺地区の世界遺産登録に向けて提案文書の準備をしている。筆者はそのためのワーキンググループメンバーの一員であり、上記の指摘はそこでの議論による。

注2) 参考文献1)の342-352頁を参照。

注3) 参考文献1)353頁を参照。

注4) 2007年3月には、大本願の一部の建て替え工事に際し、同敷地内で埋蔵文化財調査が行われた。そこで、7世紀には確実に遡る地層から大量の瓦が出土した。この発見から少なくとも古代にも瓦葺きの建物があったことが確実となった。

注5) 参考文献2)14-16頁を参照。

注6) 参考文献2)16-17頁を参照。

注7) 参考文献1)695-702頁、822-833頁を参照。

注8) 鎌倉期の善光寺伽藍と今日の町割りとの関係については4章でふれるが、より正確に言うと、伽藍範囲の西側は現西之門町のやや東側(Bブロック(図6に示す)の宿坊群と民地との背割りライン)、同じく東側は現東之門町のやや西側(Fブロック(図

6に示す)の宿坊群と民地との背割りライン)であったと見られる。

注9) 2章において「善光寺町」や「寺域」として定義するのはこの範囲である。

注10) 参考文献1)833-836頁を参照。

注11) 坂井もまた、当時の善光寺の様子を「南から犀川・裾花を始め二三の河を渡り坂道を登り詰めた処で、附近の門前町屋も少く遠ざかり、畑地や丘森が続いて、如何にも極楽浄土の霊利場として相応はしい形勝であった」と指摘している(参考文献1)827頁より)。

注12) 本章での方法は、宝永4年絵地図や図5と現代の様子との比較から分かることを読み取ろうというものである。よって、両者の特徴に類似点が多ければ、現町割りが宝永4年時にはほぼ完成していたと判断することとなる。当然のことであるが、完全に一致するかどうかは発掘調査や口伝等の別の情報を待たねばならない。

注13) 表2に示すポイント(場所は図3)にセオドライトを据え付け、角測量を行った(2007年5月16日実施)。測角は、2回行い、2つの交差が40"以内のものを有効と判断し、その平均を採った。また、A3については、注意を要する。実際の測角では回向柱設置場所前に測点(この点をA3'と呼ぶこととする)をとって測定したが(これより本堂側は巨大な香炉が置かれていて見通すことができない)、この位置は、500分の1道路管理図から求められる本堂の中心点の55m手前にあたる。その為、以下のような方法をとった。まず、図8において(図中にA3'を記載していないが、A3の前方にA3'があるものとして参照されたい)、角S3-A3'-B3と角S3-B3-A3'を計った。これらは2回の測角平均がそれぞれ0°26'40"と0°14'5"であり、これからA3-S3とS3-B3のズレ(0°40'55")を求めた(表2と図8)。本文中に記載するように、A3-S3と本堂本体の向きはほとんど一直線であるため(A3'-S3ライン延長上にA3があるため)、上記のような方法でA3-S3とS3-B3のズレを求めることができるのである。ここで、後に見るように、図8におけるA3-S3とS3-B3は同じ長さであり、△A3S3B3は二等辺三角形であるので、角S3-A3-B3と角S3-B3-A3は共に0°20'27"となる。

次に、A3-B3とB3-D3のズレについては(表2中の※3)、まずA3'-B3とB3-D3とのズレを計った(2回の平均が0°39'5")。次に、角S3-B3-A3(0°20'27")と角S3-B3-A3'(0°14'5")の差を加えて、0°45'27"とした。表2に掲げるその他の測線間のズレは全て実測結果である。

注 14) 詳細にいうと、山門から善光寺本堂を見た場合、A3-S3 に対し本堂の軸は左に $3^{\circ}35'$ ぶれている

(A3-S3 に対し、本堂は上記の角度だけ南西を向いている)。しかし、この数値は限りなく 0° である。

注 15) このズレが、表 2 で示す累積のズレ ($1^{\circ}47'5''$) である。

注 16) 現在の B3-D3 間の敷石は、現本堂建立とほぼ同時期に敷設されたが、完全に一直線であり、A3-D3 間を一直線にすることが当時の技術で不可能とは到底考えられない。

注 17) (500 分の 1 道路管理図では、図上で 1mm を読めば、実際の長さで 0.5m まで (図上で 0.5mm まで読めば 0.25m まで) 読むことが出来る。都市計画関係の図面でこれ以上の大縮尺の地図は長野市当局にはなく、ここで論証しようとする内容については十分な精度だと考えられる。

注 18) 二天 (E3) ~ 旧如来堂 (N3) 間の長さを再現する場合、その線分間の途中にある D3 でのズレを以て B3 の軸をふるのは違和感があるように思われる。しかし、現場を見ると、仁王門前の階段で一気に 2m 程度標高が上がる為、D3-E3 の参道では D3 以北を充分に見通すことができない (D3 以北の参道の路面をみることができない)。参道の路面を見通して、ズレを感じるのは、仁王門の階段を上った D3 からであるので、ここでのズレを重視したのではないかと考えられる。

参考文献

- 1) 坂井衡平, 善光寺史 上・下, 東京美術, 1969.5
- 2) 小林計一郎, 長野市史考, 吉川弘文館, 1969.1